

【優秀賞】南海放送賞

「一人一人違う個性」 西条市立小松中学校 2年 前迫海音

小学校三年生のとき、家庭の事情で一度だけ転校を経験したことがある。転校先の小学校のクラスには、みんなからのけ者にされている子がいた。その子は、班での話し合いや二人組での学習で、まるで教室にいないかのように扱われていた。転校してから初めてできた友達からも、

「〇〇君とは話さない方がいいよ。変な人だから。」

と、忠告を受けた。それにも関わらず私がその子と話そうとすると、

「前に話さない方がいいよって言ったよね。」

と、怒った口調で何度も忠告された。

「どうしてあの子はみんなからのけ者にされるのだろう。落ち着いているし、優しそうで、穏やかな性格のようなのに、何がだめなんだろう」、という私の疑問はどんどん膨れ上がっていった。「あの子が悲しそうな顔をして、一日中一人で学校にいるのに、どうして誰も話しかけないのだろう？これは絶対におかしい。」と私は思うようになった。

ある日席替えがあり、たまたまその子の隣になった。とてもうれしかった。仲間外しにしている方がおかしいと思いながらも、その子に自分から話しかける機会がなかったからだ。「やっとお話ができる！」私は席を移動させて、すぐに

話しかけた。すると、その子は突然近づいてきた私に少しおびえながらも話し返してくれた。それからは、少しずつ話してくれるようになっていった。そしてその子から話しかけてくれることも増えてきた。逆に、最初友達になって私に忠告をした子とは、だんだん話さなくなってきたが、構わないと思っていた。

あるとき、

「失礼なことを聞くんだけど、どうしてみんなから仲間外れにされるようになったのか、いやじゃなかったら教えてほしい。」

と尋ねてみた。するとその子は、

「自分はみんなと違って、男の子なのに女の子が持っているものに憧れていた。だから、筆箱や服も、女の子が持つような物を学校に持って行ったり、着て行ったりすると、周りのみんなに馬鹿にされたり気味悪がられたり、笑われたりするようになった。」

と、悲しそうな顔で教えてくれた。そして、「こんなこと聞いたら、引いちゃうよね。」

と、目に涙を溜めて私に言った。

「よくここまで我慢してたね。そんなに我慢しなくていいよ。泣きたいときは思いつき泣いていいんだよ。」

私は自分なりの精一杯の優しさを言葉に込めた。その子は号泣しながら、私に何

度も何度も「ありがとう。」と言った。学校からの帰り道、誰もいない公園で二人で気が済むまでたくさん泣いた。それから、「また明日ね。」と互いに言って、家に帰った。

その日の夜、私は考えた、どうしてみんなは笑ったり馬鹿にしたりして、あの子のしたいことをさせてあげないのだろう。生きていくのに男と女などの性別は大切だと思うけど、性が他のみんなと少し違うことは、そんなに笑われることなのか。人生は一度きりだから、自分の思うように生きていきたいときっと誰もが思うはずだ。あの子が自分らしくいられるように、見方や考え方を換えられないのだろうか、と思った。そして、私だけでもいいから、あの子のすることや考えることに味方でいつづけよう、そう自分に誓った。

若者が動けば、未来は変わると思う。日本の社会は、性の多様性を認めるべきだと言いながら、テレビやネットなどでは度々体の性と異なる心の性を持つ人を気味悪がったり笑いのネタにしたりしているのをよく見る。人が心の内側に隠している悲しみや苦しみに寄り添おうとはしないで。だから、理解されない重さや苦しさに耐えられず、命を絶つ人さえいる。その悲劇を生むまで人の心の痛み気付かず、いたずらに攻撃を続ける人が何と多いことだろう。

私は、一人一人の個性を大切にできる大人になりたいと思う。そして、私の周りにもその思いを広げ、一人一人の個性を大切にできる社会を作りたい。小さな

子どもときから、老人になって命を終えるまで、生まれながらに与えられた性に苦しむなんて悲しすぎる。古い価値観から自分を解き放ち、誰もが楽しく笑顔で生活できる世界を、今、私達若い世代から実現させていきたい。